

左

このまぶたのせなごやうせ

こぢやがまをできりぬけた

めしほつものくちがそへてま

まいてはなだいの

さがしらたけすうじ

ほねかおねをうだわへ

高

たちやくおやまなんのその

うでにまかごてこじなごも

こぶいながらおやゆじこ

めくみもあしき御ひるまのちかひを

かりてもまけわせぬぞ

いふ

はしやくながらたゞのりそなのちかひを

うけて千人力ゆらぬにおくわはとじり味

せぬしへ

我

いぢいん

いぢい

うぢやくこつ

ねんかたひなげたむ御ごぬ

や井のおうらたていじ

一両に一本ゆづの

かじりまごせうし

さしつかへなく

たちやくながへは

いして見ればおくれを

としてはやくめがすまぬ

菊の

おまじくもくわぬていせい

ちからにめんじてかたにやアならねへ

仲太

おちのなまへをつけしきて

うではよわくもなまへが

大事いかでおくれを

とられません

芝

京大坂から

そごうくまで

またにかけても

おくれはよひぬ

ことかうじきこ

五郎あにいぎ

あててがはていじこーば

かたにやアなぬめへ

だん

ことかぶきのおはじまの

とびかからまじき御ごめ

きのくまのしんせいの

かれにこのきつこつぢびよへ

ほんもつをとげてつわしき

とまぎねがちからをかりて

もつて

見せるは

半

久しぶりでもちからくらへの

いまつりだしはおまへゆへ

多

たうじおやまの

ひのたかにきん

うではとも

かくすねんの

んしつしき

おやばぬひる

きしやね

なむらへつ高こと

思ふかへせこそちやえむひること

おへむえ

宗

ことせむらひのきつこつぢびよへ

いざよひのつわこつ十郎のつわこつ

せむらひのつわこつ

菊五

大はたはじやへくもてつしきでまむしすむらぶるきごちやは

あねぢそがのあこいをひきまきたをす

にほすこほむがめねなりつだこわ入

田

おしよくのがしにほごつたねい

ちからはすこしたりないが

どぶかかちたいものな

ね入

紫

ね入さんにかたふといふは

およひもないがまア

まけたいとはありせんのみ

家

としわかなねど入んきやうかのゆ入

なかくゆだんはなりませんガモウートにいぎ

ちからをおだしなねい

小

なまたちはなませのうしてつ入はめおよめ

にしほこしてほめなむーはなかつしてほめらね

て入ものだ

伸

そそな入むほほびなへんまこむ入むい

ひのひのほななかたごまをたごまこな入んこつた

かぶ入こほへしつせまこせま入りこ

おめ入がたのしほめ

ね入

ニテのしきをわたつてきた

おかげにはついでにお母の

ちかづつお母はあつて

まぬだれでもいふとひつ入

とのだがつし

かりゆだんは

でまね入のサ

時

井はるがきまのついでへいすはかりたりぬかしはね入が

ひるきのちかづつかたすにもおかぬぞ